

# デボーション

## — 主の御前に静まる —

### I ヘンリ・ナウエン著『静まりから生まれるもの』からの引用

ヘンリ・ナウエン著『静まりから生まれるもの』(太田和功一訳)から  
その冒頭にある一文を紹介する。

朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ行き、

そこで祈っておられた。 マルコによる福音書1章35節 (新共同訳)

病に苦しむ人々を癒し 悪霊を追い出し せっかちな弟子たちに応え

町々を巡り 会堂から会堂へと教え回る

こんな動きがいっぱいに詰まった文節に挟まれて この静かな言葉があります

息もつけないような忙しい活動の真ん中で 安らかな息づかいが聞こえてきます

あちこちと動きまわっている中で しんとした静寂のときを見ることが出来ます

多くの人々の問題に深くかかわっている中心に

独り退く時のことが語られています 行動のただ中に 沈黙の祈りがあります

人々と心おきなく過ごしたあとに 独りきりになる時間があります

活動について声高に語る言葉に挟まった 静けさが支配するこの文節を

読めば読むほど イエスの働きの秘訣が どこにあったかに気づかされます

それは 夜が明けるよほど前に 朝早い時間に祈りに出かけた

あの人里離れた所に隠されていたのです

その独りになれる所で イエスは 自分の思いではなく

神の御心に従う決断をする力を得ました

自分の言葉ではなく 神の言葉を語る勇気を

自分の業ではなく 神の業をする力を見いだしたのです

イエスは つねづねこう論じています

「わたしは自分では何もできない・・・わたしは自分の意志ではなく

わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである」(ヨハネ5:30)

さらに、こうも言っています

「わたしがあなたがたに言う言葉は 自分から話しているのではない

わたしの内におられる父が その業を行っておられるのである」(ヨハネ14:10)

この独りだけの所で 御父との親密な交わりに身を浸すことによって

イエスの働きが生まれたのです

独りきりになれる場所を持たなければ 自分の生活が危うくなることに

私たちはうすうす気づいています

沈黙なくして語られる言葉は その意味を失うこと

聴くことなくして語られる言葉は もはや癒す力がないこと

そして 隔たりを持たない近きは 救済(キユア)をもたらさないことを

どこかで分かっているのです

独りきりになる場所を持たないと 何をしたとしても

たちまち 内実の伴わない見せかけになってしまうことを

すでに私たちは知っています

沈黙することと 語ること 離れ退くことと 深く関わること

距離を取ることと 近づくこと 独りきりになることと

共同体に生きること これらの間に注意深くバランスを保つことは

キリスト者生活の土台を築くものです

## Ⅱ デボーションについて

「デボーション」という言葉について、いつから、誰がそのように呼ぶようになったか？についてはわからない。もっとも単純な言い方をすれば、「デボーション」とは、聖書のみことばと祈りによって主と交わることだが、「デボーション」とはだいたい次のように定義づけることができる。

生ける主との交わりのために、この世との関わりをある一定の時間遮断して、心と体と時間を神にささげ、主との交わりに専念、没頭、集中することである。

「デボーション」について書かれた書物はいくつもあるが、その中で「デボーション」という言葉は、大きく分けて、他に三つの言われ方がされてきたように思う。一つは、アンダーソンなどの言う「静思の時(quiet time)」、二つ目は、トマス・ア・ケンピスやアンドリュー・マーレイなどの言う「内なる生活(inner life)」。そして三つ目は、ヘンリ・ナウエンなどの言う「霊性(spirituality)と黙想(meditation)」というテーマから語られるものである。

### 1. 静まることの大切さ

マルコによる福音書1章35節の前後をごらんになっていただきたい。主イエス・キリストが祈られたその前日は、安息日であったのににもかかわらず、息のつく暇もないほど、数多くの活動が満載されていた。会堂で権威ある者のように教え、汚れた霊を追放された。いずれも気の許せない気の張り詰めた働きだった。その後、シモン家に立ち寄られ、休息を取ろうとされたのだろうが、姑が熱病で臥していたので、手を取って癒された。夕方になり陽が沈むと、主の噂を聞いて、カペナウムの町中から、人々が病人や悪霊につかれた人たちを連れて、シモン家に押しかけ戸口にまで人があふれた。主は病をいやされ、悪霊を追放された。そこに集まった最後の一人まで、手を抜かずに相対し帰途に着かせた頃には、夜も大分更けていたことだろう。

そして、「夜の明けるよほど前」である。主はどれだけ睡眠をとったのであろうか。あの嵐の海でも熟睡できた方であるから、きっと安眠できたであろうが、それでも三時間に満たないような睡眠である。どんなに疲れていても、睡眠時間が少なからうが、父なる神に祈り、共に過ごす時間を欠かさなかったのである。陽が昇ると、弟子たちの主の名を呼ぶ声が静けさを破る。「皆があなたを探しています」という言葉に応え、主は弟子たちと共に他の町々に出かけて行った。

ナウエンは言う。主の息もつけないような忙しい活動の真ん中に、安らかな息づかいが聞こえる。しんとした静寂を見る。多くの人々の問題に深く関わる中心に独り退く姿があり、行動のただ中に沈黙の祈りがある。人々と心おきなく過ごしたあとに独りきりになる時間がある。そのところで、自分の思いではなく、神の御心に従う決断をする力を得た。自分の言葉ではなく、神の言葉を語る勇気を。自分の業ではなく、神の業をする力を見いだした。このただ独り、御父との親密な交わりに身を浸すことによって主の働きが生まれたと。

皆さんも、独りきりになれる場所を持たなければ 自分の生活が危うくなることに薄々気づいているのではないか。主と共に、独りきりになる場所を持たないと、何をしても、それは内実の伴わない見せかけになってしまうことをすでに知っているのではないだろうか。

## 2. 沈黙することなしに語るができない

主の前に静まり、主の言葉を聴かずして、主の働きとしての活動はない。もし、主の言葉を聴かずして活動するなら、それは私の働きであり、主の働きではない。また、主の前に沈黙して主の言葉を聴かずして、主の言葉を語ることはできない。もし、主の前に沈黙することなく、主の言葉を語ろうとすれば、それは私の言葉であって、主の言葉ではないのである。

わたしが暗闇であなたがたに話すことを、明るみで言え。

耳にささやかれたことを、屋根の上で言い広めよ。 マタイ 10：27

誰もいない暗がりの中で、人けのない寂しい所で、独り神の御前にひざまずき、主の語りかけを聴く。そこで語られたことを明るみに出て、人前に立ち語る。これが、説教であり宣教である。

かつて東京聖書学院長だった小林和夫師は、私が修養生だった頃に、「みことば信仰」ということを徹底して教えられた。それは、牧者、伝道者になる者にとって問われる最低限のことであり、またこれ以上のことはない。その時によく引用されたのは、車田秋次師の献身のみことばである。それはサムエル記下 18 章 22 節である。アブサロムの反乱を鎮圧するために戦いに出たダビデの軍師ヨアブは、ついにアブサロムを討ち取った。その戦果を伝える伝令に足の速いアヒマアズが自ら買って出た。その時、ヨアブがアヒマアズに言った言葉は「我が子よ 爾は充分の音信を持たざるに 何故走りゆかんとするや」(サムエル下 18:22 文語訳)であった。私たちがこのアヒマアズのように、語りたいというはやる気持ちと、語らなければならないという義務感に押されて、主の語りかけを聴かず、主のなされたみわざを見もしないで出て行ってしまふことがある。聴かずして、見ずしてどうして遣わされることができるのかというのである。それで、車田師はこのみことばをとおして、主のみことばを聴くことに自らの生涯をささげる献身をしたと言われる。それによって卓越した「みことばの役者(えきしゃ)」、「みことばの人」となられたのである。「主のみことばを聴くことに自らの生涯をささげた」というのが、昔も今も車田師に独自の献身のあり方だった。

### 3. 隔たりを持たない近さは救済をもたらさない

伝道・牧会はいいい加減なものではない。ひとりの人がいやされ、救われるために祈ってゆくうちに、「私が関わらなくて誰が関わるのか」というような、強い使命感を帯びてくる。例えば、自死願望のある人に関わっている場合、私たちはその人と一時も離れられないと思う。しかし、その人に間断なく関わっている間は、主が働いて下さる余地はない。両者の間に隔たりを持つことが大切である。しっかり握っていたものを手放し、主の御手に委ね、主のわざを待ち望むことのために、いっさいの働きから退き、主の前に静まることが求められているのである。

イエスは言われた、「よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、必ずその百倍を受ける。すなわち、今この時代では家、兄弟、姉妹、母、父、子および畑を迫害と共に受け、また、来るべき世では永遠の生命を受ける。 マルコ 10：29-30

このみことばは、しばしば親に対して不遜な態度を取ったり、親に反抗したりすることの言い訳に利用されることがあるように思われる。親に反抗している人は、先ず「あなたの父と母とを敬え」(出エジプト20:12)という十戒のみことばを学び、それに心から従うことができたら、上掲の福音書のみことばに聴く者でありたいと思う。愛してやまない両親を捨ててということである。

私たちにとって、家族はかけがえのないものである。自分のいのち以上のものかもしれない。しかし、それを本当に大切にしたいと思うのなら、潔く捨てなければならない。そして神を第一とするのである。家族は第二として位置づける。そうすれば、家族を本当の意味で生かすものとなる。

私たちと家族との関係で難しく思うのは、両者の距離感である。どうしても近づきすぎてしまう。そのため、子供であれば、近づきすぎて過干渉、過保護となり、溺愛となってしまふ。それによって子供を駄目にしてしまふ。大切にしようと思うあまり、かえって損なってしまうのである。正しい距離を保つことが難しい。しかし、家族を捨て—それは神に明け渡すことであるが—、神を第一とし、家族を第二に位置づけるなら、神は、私たちと家族の間に立って、常に最も良い距離を保って下さるのである。

財産も同じことが言える。大事にしたいと思うなら、神に明け渡し、第一の座を譲る。そうすれば、富に溺れて身を滅ぼすこともなく、正しく管理し真に生かすことができ、神に喜ばれ、もっと多くのものを神に委ねられる者となる。

良い仕事をしたいと思うなら、主日を守り、神を第一とすることです。健康、そしていのちも同様です。

そのように、神の前に静まり、こうした私たちにとって一時も忘れることのできない大切なものを一旦手放し、神に明け渡すなら、神は正しい関係を新しく築き、大切にしたいそのものを生かして下さるのである。また、損なわれているところを回復させて健やかにし、解決に至らせてくださるのである。

### 4. 独りにならないで共同体に生きることができない

As the Lord God of Israel liveth, before whom I stand, there shall not be dew nor rain these years, but according to my word. 1king 17:1 (欽定訳)

上掲のみことばは、エリヤが暴君アハブ(北王国の王)に向かって宣告した預言である。エリヤはアハブ王の前に立っている以上に、神の御前に立っていることを意識してこの言葉を語ったのである、それ故、自分の語ったことによって王の怒りを買ひ、処刑されかねなかったにもかかわらず、神の使信を曲げずに、神の語られたとおりに、堂々と力強く語る事ができたのである。

「信仰の自立」ということが言われるが、「信仰の自立」とは、主の前に自ら独り立つことであるが、この「信仰の自立」なくして教会という神の共同体に生きることはできない。一般的にも、アイデンティティを確立していない人は、正しい人間関係を保つことができないと言われる。越えてはならない一線を越え、他人の心に土足で入り踏みこむようなことを仕出かすからである。たとえ夫婦であっても一線を画し、一定の距離を保つことによって正しい関係を築くことができる。故に、主の御前に独り静まることなくして、共同体に生きることはできないのである。人にも物にも依存せず独り立つ。その時、彼は神の御前に立っているのであり、神と、神のみことばのはかり知れない力を体験する者とされるのである。親しき仲にも礼儀ありで、馴れ合いの交わりの中に、主にある交わりはないことを肝に銘じてほしい。

## 5. デボーションと聖書通読

デボーションの中で聖書通読することを強くお勧めしたい。旧新聖書を未だ一度も通読していない人があれば、何はともあれ、創世記からヨハネ黙示録まで通して読んでいただきたい。モーセ五書の中には細かい律法の規定や、想像の及ばない祭儀の道具について記してある。歴史書にはおびただしい数の聞き慣れない人名がある。そのような場所もスキップせずに忍耐して読む。私たち日本人は向学心に篤く、聖書を読むと、わからないところが気になる。しかし、聖書の通読においてはわからない部分は放置し、わかるところをどんどん読み進めてゆく。そのようにして最終ページまで読破する。

そうすると、聖書がよくわかるようになる。例えば、難しい聖書の箇所も、よくわからないが、だいたいこのような意味だろうと推察すれば、ほぼ間違いがない。また異端などの間違った教えを聞いた時に、異端について予備知識がなくとも、その間違いがわかる。聖書は全体から部分を読んでこそ、健全な理解ができる。異端は聖書の一部を取り上げ、強調する。通読し全体を読んでいけば、不健全な聖書の理解をしていることがわかるのである。

キリスト者は、問題に直面して主に祈る。すると、主はみことばを与えて下さる。そのみことばを信じ従うことによって、主は解決を与えて下さる。そのような話をすると、「どのようにしてみことばが与えられるのか？」という質問をよく受ける。それに対する答えは、「デボーションにおいて聖書通読することによって、みことばは与えられる」といつも答える。

ある人は、目をつぶってアトランダムに聖書を開き、それを主が与えて下さるみことばだとする。不都合なみことばと出くわせば、また違う箇所を同じ要領で開く。そうではなく、通読する時に、主は実に適時にみことばを備えて下さる。

失業したF兄が、次の仕事が見つかるまでの間、デボーションの指導をしてほしいという申し出があった。それで、マン・ツウ・マンで指導することになった。聖書を1章ずつ毎日読み、その読んだ箇所から教えられたこと、従うべきこと、そして応答の祈りを書いてもらう。すると、毎日、ワープロでA4紙に2~3枚書いて、教会に原稿を持ってくる。その日も書いたものを持って来て、その日の通読箇所について話し合っていた。そこに一本の電話が入った。H兄の母親が脳内出血で倒れ、病院に運ばれている。職場から病院に直行する。

祈ってほしいという緊急の連絡だった。その日のF兄の通読箇所次のみことばがあった。「彼は実に、瀕死の病気にかかったが、神は彼をあわれんで下さった。彼ばかりでなく、私をもあわれんで下さったので、私は悲しみに悲しみを重ねないで済んだのである」(ピリピ2:27)。実にふさわしいみことばだった。私たちはこのみことばで心を合わせ祈った。寸秒を争う事態だったが、手術がなされ一命をとりとめた。それから十年以上、彼女は何の後遺症もなかった。主は通読の中でこそ、必要なみことばを備えて下さる。

## 6. 持続するための秘訣

わたしは一つの事を主に願った、わたしはそれを求める。わたしの生きるかぎり、主の家に住んで、主のうるわしきを見、その宮で尋ねきわめることを。詩篇 27: 4

デボーションを持続するためには時間と場所を定め、何があってもその時間と場所は譲らない、そのように習慣化することである。これはまさしくデボーション、即ち献身が問われている。何をさておいてもこの時間を神にささげるといふ強い意志を持たなければならない。

さらに申し上げるならば、デボーションが充実して持続されてゆくためには、上掲のみことばにあるように、「主のうるわしき」を見る経験を持つことである。この天国の前味を知った人は、主との交わりが何にもかえがたい、慕わしいものとなる。

主イエスは、あの忙しい働きのただ中であって、どうしてあの静まりの時間を確保することができたのか。それは、父との交わりが何にもかえがたい、慕わしいものであったからである。

私にとって暗がりの中で主に語っていただいた経験は忘れられない。特に救いと召命のみことばを受けた経験は、一生忘れることのない経験であり、思い出すたびに目がしらが熱くなる。あの日あの時、主に語っていただいたのだという経験を持った人であるなら、どんなに忙しくとも、疲れていても、また霊的にダウンしていても、形骸化せず、いのちのかよったものとして、主の御前に静まることを重んじ、持続させてゆくにちがいない。

## Ⅲ デボーションの実際

バークレイ・F・バックストンは、デボーションを始める前に、神の前に20、30分沈黙したという。私たちも先ず声を出して祈る、みことばを読むという前に、1、2分でいい、主の語りかけを待ち望み、主の前に沈黙する時を持ちたい。それから徐に聖書を開き、みことばを読む。それぞれ通読のペースにしたがって1章ないしは数章を読む。1章を読めない場合は1段落でもいい。霊想書を使っている人は、そこに記されているみことばの一句でもいい。みことばを読み、その中から特に示される1節、一句を選び、それを思いめぐらし、そこから主の語りかけを聴く。

ここで一冊のノートが必要である(もちろん、パソコンでもいい)。主が語りかけて下さったその1節、一句を書きとめる。さらに、教えられたこと、感じたこと、生活の中で従うべきことを書き記す。最後に、その書き記したものにに基づき、みことばへの応答の祈りを書き、応答の祈りをする。その後、それぞれの持っている祈りの課題にしたがって祈る。

- (1) みことばを待ち望む
- (2) みことばを読む
- (3) 1節を黙想し、主の語りかけを聴く
- (4) 主の語りかけとして聴いたその1節を書きとめる
- (5) 教えられたこと、感じたことを書き記す
- (6) 主に従うべきことを書き記す
- (7) 応答の祈りを書く
- (8) 応答の祈りをする
- (9) 祈りの課題を祈る

所要時間は？少なくとも20分は持ちたい。(1)-(9)すべてを書くということではない。箇条書きでもよい。「デポジション」という主と共に過ごす時間は、理想としては、お金を十分の一ささげるなら、時間も十分の一ささげることである。つまりは、約2時間30分である。

**演習** 20分間、それぞれ静まってみ言葉を読み、黙想し、み言葉に以下のように応答する。

### イザヤ書40章27-31節

- (1) 主の語りかけ (心に残った1節をここに記し、この1節に集中し、黙想する。)
- (2) 教えられたこと・感じたこと (どんなことでも、箇条書きに書く。)
- (3) 主に従うべきこと
- (4) 応答の祈り

**分かち合い** 2, 3人で、それぞれ書いたものを読みながら、みことばをどのように受けとめたかを分かち合う。